

20世紀初頭の「世界無銭旅行」考 矢島保治郎の 第1 次入蔵と押川春浪の武俠世界

著者	松本 高明
雑誌名	神田外語大学日本研究所紀要
号	11
ページ	180-140
発行年	2019-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001580/

《論文》

20世紀初頭の「世界無銭旅行」考

——矢島保治郎の第1次入藏と押川春浪の武侠世界

松本 高明

はじめに

1909年2月3日午前、横浜港から出帆せんとする讃岐丸甲板上、赤青のジャケットに白いスカーフそして乗馬長靴姿で身を固めた長髪の男が、見送りの友人知人達と挨拶を交わしていた。男の名前は矢島保治郎といった⁽¹⁾。岸壁には白地に黒々と「欲送世界無銭旅行者矢島保治郎君」と書き上げられた幟数旒が支援者によって掲げられている。彼はここを起点に10年かけて五大大陸を踏破する「世界無銭旅行」の冒険に旅立つところだった。

彼が出発した頃は、まだ「探検の時代」と言われた19世紀の延長線上にあった。特にその中葉から北東アジアにまで拡大したグレート・ゲームは、所謂「西洋の衝撃」と呼ばれる国際体系の変動をもたらした。その結果、中華世界を形作る華夷秩序⁽²⁾は圧倒され、その辺疆諸地域は国民国家的枠組みへの参加を求められた。そのことは辺境が英国、帝政ロシア、そして清朝（1912年以降は中華民国）の主権争奪戦に巻き込まれることを意味した。当該時期に展開された「探検レース」⁽³⁾はその一つの表象であり、それまで清朝の方針の下で自ら厳しい鎖国政策を敷いていたチベット⁽⁴⁾も、ロシアのプルジェワルスキー（Н.М.Пржевальский）やスウェーデンのスヴェン・ヘーデン



〈資料-1〉

自らの意匠によるチベット軍服を纏った矢島保治郎

出典：浅田晃彦著『世界無銭旅行者 矢島保治郎』（筑摩書房、1986年）

(Sven. A. Hedin) といった探検家達によってその門が叩かれるようになっていた⁽⁵⁾。けれども大規模なキャラバンを組んで挑戦した探検家達で禁断の地であるチベットの都ラサ（拉薩：ལ་སྐ་ག་）の門をくぐった者はおらず、実際にこのレースの中でその地に足を踏み入れることができたのは Pandit と呼ばれる英領インド政府に派遣された調査員のみであった⁽⁶⁾。

19世紀末、日清戦争後の日本においてはロシアの南下政策が意識されるようになり、高まるナショナリズムを背景に朝野において日本の将来の選択として海外進出が唱えられるようになっていた。しかしそこで主に論じられているのは、台湾を足がかりに南洋諸島方面に進出を企図する南進論が主流であった。一方でチベットなどの中央アジアに目を向け、そして行動に移したのは、仏教の源流を求める宗教的情熱を持った人々であった⁽⁷⁾。島根県の仏教僧能海寛が仏教発展のためと「列強の介入で危機に瀕しているチベットの救済」を唱えた言説は、こうした情勢を強く反映させたものだった⁽⁸⁾。

20世紀前半、このような使命感を持ってチベット⁽⁹⁾に挑戦し入域を果たした日本人、すなわち入蔵者は9名を数えた⁽¹⁰⁾。すなわち入蔵の先駆者たる河口慧海（1900年、1914－15年入蔵）、それに続く寺本婉雅（1905年入蔵）、あるいは青木文教（1912－16年入蔵）や多田等観（1913－23年入蔵）は大蔵経の招来など宗教的文物収集や教義修学を目的にしており、まさにこうした分野に業績を残した者達である。それに対して、成田安輝（1901年入蔵）や野元甚蔵（1939－40年入蔵）、木村肥佐生（1945、1946、1948－49年入蔵）西川一三（1945年、1946－47年入蔵）らは国家戦略や諜報等の目的で入蔵を志していた。特に木村と西川は大戦後に当該時期におけるチベットの内外情勢を外国人の視点から緻密な記録を残している。

ところが冒頭の矢島保治郎という人物の場合、特に入蔵の目的や行動においては、この分類に当てはまらない。彼は1882年群馬に生まれ、日露戦争従軍後に退役して冒険家を目指した。そしてそれまで各国からの挑戦者達を斥けてきた四川ルートを通して入蔵することに初めて成功し、さらにインドから2度目の入蔵も果たした。そして禁断の都と言われたラサに7年の長きにわたって滞在し、清朝崩壊に伴う辺境の動乱状態をラサという地で記録したことや、ダライ・ラマ13世の側近となった足跡は、余人が為し得なかったものであるというのが後世のチベット史家の評価である。矢島は滞在中、チベット政府（ガンデ

ンボタン：དཀར་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་⁽¹¹⁾）に身を置いてチベット軍の訓練を近代化するための仕事に従事したため、軍事的目的で入藏したように扱う記録もある⁽¹²⁾。しかし木村肥佐生が「退役軍人であって、退役軍事専門家ではなく、彼の目的は冒険にあった⁽¹³⁾」と断じるように、彼の出発時における目的や準備は国際政治には関係のない世界無銭旅行にあり、その時点ではチベットとは単なる通過点でしかなかったのである。

先述の通り矢島が横浜を出発した1909年2月3日から、チベットで成した家族と共に室蘭に帰着する1919年1月24日までの10年間が、この旅行期間ということになる。金井晃は矢島の行動を軸に、この旅行にいくつかの区分を与えている⁽¹⁴⁾。すなわち第1期（上海～北京、1909年2月3日～4月11日）と北京滞在（約3ヶ月）、第2期（北京～成都、1909年7月21日～9月10日）及び成都滞在を中心にタルツェムドと重慶往還（約14ヶ月）、第3期（タルツェムド：打箭炉、現在の康定⁽¹⁵⁾～ラサ、1910年11月12日～1911年3月4日）とラサ滞在（約1ヶ月）、第4期（ラサ～カルカッタ：現コルカタ、1911年4月3日～5月2日）とカルカッタ滞在（約5ヶ月）、第5期（英国船籍貨物船S.S. カラモ号乗務：カルカッタ～ニューヨーク～シンガポール～横浜～カルカッタ、1911年9月～1912年6月上旬）、第6期（カルカッタ～ラサ、1912年6月19日～7月23日）、ラサ滞在（～1918年10月）となる（年表参照）。

各期の旅行形態の特徴を言えば、第1期及び第2期は日本で思い描いた旅行像の修正過程であり、第3期と第4期、第6期は身分を明かせない潜行となっている。大きな変化を迎えたチベット情勢や社会状況に焦点を当てるならば、当然第3期以降が考察の対象となろう。しかし本稿は、かかる破天荒な人物がなぜこの大旅行に身を投じたのか、彼を取り巻く日本社会のいくつかの思潮に注目しつつその文脈の中に位置づけることを目的としている。そのため現地社会に即し合理的な旅行作法を確立した第3期以降は、それに適していない。加えて第5期半ば以降に当たる第2回入藏は、むしろその目的において「世界無銭旅行」ではなく、資金を与えられて「ある使命」を持った潜行であるので、これも対象には適さない⁽¹⁶⁾。

実のところ、矢島はこの旅行以前に海外渡航をした経験は軍旅以外なかった。日露戦争に陸軍歩兵として従軍したのがそれであるが、目的と宿営地が与えられている部隊行動と、彼が思い立った「世界無銭旅行」が根本的に異なる

のは言うまでもない。それを具体化するには、彼自身の想像力と先達の情報に依拠して模索していくより他無かった。ここに彼が幼少の頃より親しみ、そしてこの冒険のイメージを与えた者の存在が必要となってくる。矢島の場合、幼少期より親しんだ少年小説とその牽引者となった押川春浪は、後に交遊する近しさも持ち、まさにそこに位置する存在だったと言える。

押川春浪（本名方存）は明治日本において少年小説、とりわけ「科学的冒険小説」の分野を確立した作家として名を残している。彼は矢島より6年早い1876年に生まれ、その生い立ちにおいてはよく少年の頃から粗暴な振る舞いや野球への傾倒が災いして転校を繰り返したことが強調される。しかし剛毅さと共に交友関係の広さや世の不条理への潔癖さ、正義感も同時に指摘される。彼は最終的に落ち着いた東京専門学校⁽¹⁶⁾の在学中に執筆した「海底軍艦」によって一躍脚光を浴び、以後少年小説の旗手として活躍した。

「武俠とは、自由、独立、人權の圧制者に向って、飽まで対抗するの精神です。不法なる圧制者を倒して、弱者の權利を擁護するの精神です（仮名遣いママ）」（『武俠の日本』文武堂、1903年）。

彼はこの「武俠」という勤善懲惡の精神を旗印に、現在で言うところのファンタジーの要素を組み込んだ冒険小説を作り上げたのであった。その、世界を舞台に横暴な強国の振る舞いに立ち向かい勝利する日本人を描いた作品群は圧倒的な支持を得、押川は少年小説の礎を築いた者として評価されている。ただし彼に対しては戦後も活発な批評が行われているが、舞台設定の奇抜さや登場人物像の魅力などを評価しつつも、そこにうかがえる勃興期日本における無邪気なナショナリズム⁽¹⁷⁾の色彩や、勢いはあるが豊かさを欠く表現や平板な展開を批判的に見る評者も多い⁽¹⁸⁾。

一方で少年小説を政治小説の系譜に位置づける研究者は、文学性そのものよりも伝奇性に価値を見出し、そして読者との世界共有を重視した執筆姿勢に光を当てる⁽¹⁹⁾。本稿は後者と意見を共有するものだが、それは国民統合の進む時期に発生するナショナリズム⁽²⁰⁾は一部のイデオログによって形成されるものでなく、まさに大衆が意識を共有することに本質があるからである。その観点からすれば、鈴木康史の研究⁽²¹⁾は大きな示唆を与えてくれる。すなわち主人公と、そこに集う「肝胆相照らす」英雄的集団の一員に読者も参加させるという春浪の小説の手法が、彼の現実社会における活動にも援用されたという

構図である。

矢島は陸軍退役後、日本力行会に入会したのち、力行会会長の島貫兵太夫の紹介で押川宅にしばしば遊ぶようになっていた⁽²²⁾。また押川も、矢島の出発に当たっては当時高価だった写真機を贈ったことから、彼の冒険を小説として世に出す相談をしていたと考えられている。矢島自身も押川との共作に期待を持っていたようで、後に滞在中のチベットから報告も行ったりしていた。矢島は押川の作品を愛読していたと伝えられている⁽²³⁾。そしてその押川の得意な分野として、武侠の精神を体現した英雄的主人公が活躍する設定の冒険旅行小説があるのだ。そのイメージを具現化し、自らが主人公として実体化するという構図は現代社会でもよく見られるものである。ただしこうしたイメージの実演を志向する者が、他の押川支持者とどのように異なるのかということも併せて見ていきたい。そこで押川小説の「読者の共同体」という枠組みを用いて矢島の位置の説明を試みたい。

そのために次のように議論を展開する。まず議論の素材として、矢島が入藏過程において出発時から旅行様式を変化させていく様を追う（第1章）。言わば失敗の検証ということになるが、この前後の落差に彼の意識変化を掬い取れるのではないかと考える。次に時間軸を前に戻して矢島の少年期を見る（第2章）。押川が世に出たのは、ちょうど矢島が編入先の前橋尋常中学沼田分校を退学する直前のことであった。矢島は社会的思潮と共に、愛読したという押川の小説の影響も受けていたことであろう。そこで社会に広く共有されている思潮としてナショナリズムや海外雄飛、南進論を取り上げ、それが押川の冒険小説に取り込まれていったのか確認し、その後に鈴木康史による押川を中心とした「読者共同体」について紹介する。最後は矢島の旅行準備期間における動きの整理を行った上で、押川の「読者共同体」との位置関係を措定する（第3章）。春浪が能動的に読者との共有空間の創造と充実に関わったとして、そこに矢島保治郎が組み込まれていたのかが焦点となる。

なお考察にあたっては、矢島保治郎が自らの言葉で残した資料が限られるため、矢島本人の日記をもとに構成された金井晃によって編集された『入藏日誌』や浅田晃彦と江本嘉伸の評伝、および新聞記事等に基本的に依拠することとし、さらに彼を取り巻く社会背景も加味して作業を進めていくこととする。一方押川春浪については彼自身の言葉も残されており、また比較的論考も多い

ので、それらに依拠して進める。

第1章 矢島の「世界無銭旅行」像の挫折

「本紙七面記載の如く三日正午当港出帆、世界無銭旅行の途に上りたる矢島保次郎氏（二十七）は…（中略）…兵馬^{こう}挫^{うち}そうの裡、露清の両語を習い、その後英語研究の余暇、同宿の早稲田大学へ通学せる支那人某に就きて更に清語を学び、次で露語を覚え、自今は英、清、露の三ヶ国語に通ぜりと…（中略）…尚、支那内地旅行の時は文人の姿となり、アフリカ内地にては各鉱山及び殖産物等を土人生活をなすべく、南米北米にては労働に従事しつつ各地を跋涉し、ペーリング海峡より北太平洋を渡りて露領に入りては北海産業の未だ世間に知れざるを探り、それより北満に入り帰国する筈なりと。」（『世界無銭旅行者は白嚮隊の勇士』『横浜貿易新報』明治42年2月4日付）

先述の通り、矢島にとって初めての海外渡航であり独行であった。いくら身体剛健で自信に満ちあふれていたとしても、初めての土地ではほとんど経験のないことを始めようとしたのである。ここでの行動は今後の無銭旅行の土台となるので、初めに見ておくことにする。

1. 「第1期行程」上海

2月7日上海に降り立った矢島は、その奇抜な出で立ちのまま内陸に歩を進めていった。

日清戦争終結後、大陸を目指す日本人旅行者や居留民が顕著に増加しており、矢島が足を踏み入れた時には、例えば上海では在留日本人は8000人余となっていた⁽²⁴⁾。

ところで冒頭の記事において紹介されている彼の旅行作法に関する腹案は、中国の領域内では「文人の姿になり」としか書かれていない。ただ既出の2月4日付東京朝日新聞の記事には、「旅行中の決心 各所を通過するに困難を感じるを以て、重なる場所には諸氏より紹介状を貰いたれば、鋤、鋤等を持ちて労働をなさずとも無事に旅行を遂げ得べし（以下、略）」と多少具体的に示されている。つまり旅行においては各地の人と交流して紹介状を書いてもらい、

その人を頼ることが現地において労働による資金調達の手間を省くことになるだろうという目算である。裏を返せば、彼自身も出発段階では現地において仕事を探して補充していく計画だったのである。

実際、上海でも彼は到着初日に投宿するよりも早く、あらかじめ手に入れていた紹介状を携えて東亜同文書院院長根津一退役陸軍少佐を訪ね、そこで旅の心構えについてアドバイスを受けている。このような紹介状を持って各地の中国在住の名士を訪ね歩くことで、現地の情勢を知る手がかりを得ることが出来た。彼は些か顯示欲が強いところが各所に見受けられるが、社交的とまではいかないものの外向的で人との交流を厭わなかったのも幸いした。

さらに当時の気風として、特に外地に住む日本人の間では互助意識が強く、新着者に対して何らかの便宜を図ることに積極的であった⁽²⁵⁾。それ故、紹介された相手の生活に余裕があれば、寄食を提供して貰うことも期待できた。上海では出身地である群馬県の上海における県人会世話役梅原新三郎（2月7日から3月上旬）の私宅に約ひと月滞留し、付近の観光などをしたらしい。

また彼は「無銭旅行」を標榜する割には移動手段に関する出費には比較的無頓着で、この期間における移動はほとんど公共交通機関を用いていた。例えば上海に到着してから東亜同文書院を訊ねる際も人力車を用いた。こうした滞在を経て3月下旬に定期航路船を利用して長江を遡上し、南京を経由して漢口へ達した。さらに翌月、対岸の武昌から北京まで鉄道で移動した（地図-5参照）。

2. 「第1行程」武昌から北京

この上海から北京までの行程において、彼が滞在したのは人口が稠密で産業が発達した武昌や保定などの都市であり、こうした地域は交通網も発達しており資金さえあれば移動には苦勞しない地域であった。そして北京には3ヶ月ほど滞在している。

前掲の記事に見る如く、彼は出発前から新聞に自らの企画を喧伝する紹介記事を掲載させていたため、現地日本人社会においても注目的になっていたらしい。そのため初めの頃は行く先々で歓待を受け、居留民宅に寄寓することができた。彼はこの5ヶ月半の間にのべ50日前後寄宿させてもらうことに成功している。

加えて彼は中国各地に配置されている帝国陸軍のネットワークも積極的に利用した。当然のことながら、中国の主要都市にある日本領事館には領事館付駐在武官が配置されていた。当該時期は日露戦争後ということもあり、大陸の各種軍官学堂では日本の軍人が教官として招聘されていた。こうしたつてを利用し、武昌では陸軍軍官学堂教官をしていた鑄方德蔵大佐方の公館に寄寓（1909年3月14日から4月上旬）、また北京では公使館付武官青木宣純少将の世話を受けることが出来た。さらに、租界のある地域では、警護のために軍が駐屯しており、武官からの紹介で便宜を図って貰うこともあった⁽²⁶⁾。例えば北京の駐屯軍にあって、チベットやその他内陸部についての情報や地図、あるいは軍役についていた頃に慣れ親しんだ装備等を手に入れている。

また資金面で大きな課題である「労働」などを試みているのもこの時期の特徴である。具体的には3月に武昌で前出の鑄方大佐の紹介状を持って在住の軍人や民間人を訪れ、日本から持ってきた医薬品を売った事例や、4月に北京の長春亭勝木洗濯所に雇用され、住み込みで日本人や欧米人の顧客に対する集配作業に従事している。前者に関しては、幸先よく次の行程に必要な汽車賃を稼ぎ出すことが出来たとするが、後者になって持ち前の正義感と直情径行かつ狷介な性格が災いし、一ヶ月で解雇される結果となっている⁽²⁷⁾。そもそも彼自身、少年期から家業の座繰機枠の製造販売に関わったことがなく、また中学退学後は軍役に就いているわけであるから、本格的な商売の経験が皆無に近かったはずである。

こうした内に北京では自らの風評を知ることとなった。大阪毎日新聞特派員豊島捨松氏が「洗濯屋ニキタ当時ハ皆感心シテキタ。一声館ニ居ルト聞イテ奇妙ニ思ツテキル。働クニシテモ先ヅソノ髭ヲ剃リ、頭髮ヲ普通人ノヤウニシ、粗服ニ改メナクテハ傭ツテクレマイ。ソレデナクテモ君ハ一癖アリアウナ顔ツキナノダ。平人ニナツテ働キナガラ行き給へ」（浅田、53頁）と矢島に忠告した。長髪で髭を蓄え、「世界是我家」と墨書きした背囊を背負った乗馬長靴姿の眼光鋭い男に対する評判は、現地の日本人社会では芳しいものではなかったようで、紹介状なくしては商売も成り立たなかったようである。

結局、解雇以降、北京においては内陸に向けて出発するまでの3ヶ月間、収入を得ることもなく下宿を兼ねた旅館⁽²⁸⁾に滞在することになった。この段階で矢島の資金計画は破綻し始め、北京滞在の段階で準備資金を銀行から引き出

す状況に陥っている。彼自身もこの点には頭を痛め、新聞社や力行会、或いは支援者などに連絡をとり、援助を増やしてもらうよう手紙を送っている。

3. 「第2行程」西安、蜀の栈道を通り成都へ

7月21日に北京を発し、汽車で河南省沿華（偃化）まで移動した後、本格的に内陸部の移動を開始した。

この先の地域には当時まだ鉄道が敷設されていなかった。そのため沿華以西、西安から宝鶏、そして「蜀の栈道」を辿って四川盆地に入る行程においては、徒歩でなければ駄馬車もしくは伝馬、駕籠を県衙（県の役所）に依頼して出して貰うのが一般的であった。上海で訪れた東亜同文書院で出会った学生らは、まさにこういった地域を徒歩で踏破して現地体験を積んでいたのである。しかしながら矢島はこの50日に及ぶ区間を、最短かつ負担⁽²⁹⁾を少なくして通過することを優先したらしい。初日こそ徒歩で挑戦してみたものの、炎夏の気候のためにそれを諦め、体力を消耗しないよう駄馬車や伝馬を調達して移動を重ねていった⁽³⁰⁾。ただ日程は急で、同じ地点に滞在したのは5回のみである。特に宝鶏出発以降、10日以上進み続けることも珍しくなかったのである。（地図-6）

この地域においても、西安や漢中といった都市部では日本人がいたが、沿岸都市部で用いてきた紹介状による合力は期待できなかった。反面、奇態な風采と、彼がみずから新聞等で宣伝していたため、日本人旅行者の他、日本滞在経験のある県衙役人や子弟を東京の大学に留学させている名士などが興味を示して話しかけて来るようになり、交流対象に広がりを見せるようになっていた。自らも次第に意思疎通の自由度が増しており、蜀の栈道半ばの留壩にある張良廟では自ら門を叩き、寺の道士と歓談して一泊の宿に預かっている。またこれまで日誌の話題に上らなかった労働者層の人々とも交わるようになっていった。ただそれに反比例して互いの欠点も見えるようになってきたのか、現地人との摩擦も増えている。そのたびに持ち前の短気を起こし、合力や宿ともめて野宿などもしている。

まさにこの時期に体得していった中国本来の移動手法は、その後四川盆地に入った後の行動に生かされていくことになった。また、沿岸都市部において日本人社会の助力に依存していた状態から脱却しつつあることも注目に値する。

ただし「無銭旅行」という作法から見た場合、当然収入は望めないで、支出を出来得る限り抑制したということだろう。

4. 「第2行程」成都、タルツェムド

成都に到着した彼は、はじめの十日は西本願寺派遣僧田中哲巖の公館に寄食し、その後陸軍より招聘された栗屋貫一砲兵大尉方の公館に移った。それも陸軍速成士官学堂と測絵学堂（測量製図学校）の体操と剣道の教師という仕事を得ての話であった。ただ長距離を自力で乗り越えてきたことによって自信が出てきたのであろう、現地の日本人に対して「要するに彼ら教習は日本に於いて需要なき無用の輩なり⁽³¹⁾」と、生来の狷介な性格が頭をもたげてきていることが伺われる。さらに学生からも彼が罵倒するなどの言動をすることに対して不満が出るようになっていたらしい。結局約2ヶ月でこの職も失うことになった。

「余が任や重し。此の時や冷静なる頭を以て世を達観し、而して静かに事に当たれ。何時は今社会満天下の注目点にあることぞ。怠り忘る事勿れ」とは仕事を失った翌日の日記の言葉である⁽³²⁾。精一杯の強がりではあるが、自らが世に宣伝しているために引くこともできない。またこのことがあってから、しばらく成都の日本人社会とは交流が途絶えた。彼らの援助を期待できなくなった今、彼は生活費を切りつめる為、これまで現地の人間と同じ服を身につけ固執してきた奇抜な服装を遂に諦めた。

それに対して、移動手段は最も安定的に習熟した分野だった。この成都滞在期間中、矢島は重慶とタルツェムドに足を運んでいる。「蜀の栈道」を越えてきた彼にとってはこうした単独行はたやすいものになっていた。

また矢島は、4月1日より約3ヶ月の間、成都の藏文学堂に入学してチベット語の勉強を始めている。彼は「入藏に付ては蛮人ト化す可しなり⁽³³⁾」とし、隊商の一員か僧侶に身をやつす手段で入藏を試みることにしたため、チベット踏破には語学が必要であると認識していたようだ。タルツェムドには下見の為に1910年6月27日から9月5日、そして成都でチベット潜入への準備を整え、その時機を待つために再び9月25日に入った。成都からタルツェムドまで約330km、そのほとんどが険峻な山道である。当時はほぼ馬か徒歩でさぞかしであったらと思うれたが、曰く「成都を出て四日路後は恰も故郷赤城山

中を走り回る如き心地致し申し候⁽³⁴⁾。」と、移動においてさほど困難を見せていない。

タルツェムド滞在で寄寓したのは、藏文学堂で知り合ったと思われる漢族チベット語教師の家である。また現地で知り合った日本人二人とタルツェムドよりチベット側に足を伸ばし、現地の状況を確認める旅行を行った。ここではチベット服の感触を確認し、その服装で移動はどの程度のものか把握するためだったという。彼が分け入った土地は、半年前まで趙爾豐駐藏大臣兼川滇边务大臣が清朝の命を受けて四川省軍を率いて進駐しようとするのを、チベット軍が阻止しようと戦っていた地域であった。しかし矢島が入藏する頃には四川軍はラサに進駐を果たし、ダライ不在のチベットを近代化しつつ直接統治下に置くための改革⁽³⁵⁾を始めていた。四川軍による社会改革も進んでおり、このことは彼の入藏に有利に働いたようである⁽³⁶⁾。

5. 「世界無銭旅行」から「潜行」、演出の放棄

彼はタルツェムドで時機を待つこと数週間、西安で面識を得た漢語話者のチベット仏教僧と再会するという幸運に恵まれた。イーヤンと名乗る彼は、中国で茶やタバコなどを仕入れてラサに帰る途中であったため、その隊商に参加させて貰うことに成功した。江本のいう「世界無銭旅行隊長」から「チベットの矢島」になった⁽³⁷⁾という表現の通り、この段階で彼の作法としての「世界無銭旅行」はひとまず終わりを迎え、以後は「潜入」に移っていった。

これまでの推移をみるに、彼の「世界無銭旅行」は成功裏に次の段階へ、というものではなく、破綻したために移らざるを得なかったと言った方が正しい。確かに、こと移動の技術においては本人の能力の高さを遺憾なく発揮され、非常に大きな進歩を遂げた。また宿泊先や情報の収集先の確保も、当初の日本人社会のみものから現地人へと広がっていった。けれども持ち前の狷介かつ直情径行な性格が災いして各所で摩擦を起こし、彼の想定していた「世界無銭旅行」に必要な「旅先で資金を作りながら」という作法を自分のものにすることは出来なかった。「世界無銭旅行」の要件である「有限な資金を旅先で補充しながら進む」ということが維持できず、実家に無心し続けるのは、結果としては彼の目指したであろう作法が破綻していたというべきだろう。

そうでありながら彼の書簡からは強い功名心と目的意識が感じ取れる。それ

については第3章にて検討することとし、ここでは矢島が成都で中国服に着替えた時、すなわちこれまでの「華々しい冒険家」という「自己演出」から現実に戻ったことを意味する。そして得手ではない商売や協調と忍耐を必要とする仕事に期待することを諦め、「チベットへの潜行」という乾坤一擲を狙える目標に絞った時から彼の行動は変化した。他人との無用な摩擦を避け、語学など目標達成のために必要なことに勤しんでいる。恐らく目標を定めて直線的に努力するという思考が彼には適していたと思われる。当初は半年後に予定していた入藏だが、時機到来と見るや多少の準備不足もかまわず出発した。確かに地域の政情安定などの幸運にも恵まれたが、こうした果敢な決断力は彼の優れた資質であろう。そしてこの時から彼は、単なる「格好良い冒険野郎⁽³⁸⁾」から「果敢な潜行者」になったのである。

第2章 冒険への憧憬

「自分は幼少の頃より慷慨家にて機あらば世界無銭旅行を執行せんと思ひ其順序として日本力行会に入りしが…中略…必ず成功し日本に戻り再び諸氏に面會すべし」(「世界無銭旅行者の出発」『東京朝日新聞』明治42年2月4日付)

矢島が「世界無銭旅行」を思いついたのは、日本へ凱旋帰国した後、軍曹に昇進して人生設計が見えてきたときだとされる(浅田、25頁)。日露戦争の激戦を乗り越えて帰国し、平時の勤務態勢に戻った時に、少年期に憧れた冒険旅行への憧れが戻ってきたのだと思われる。そこで、本章では矢島の育った環境と、その時代に躍り出てきた押川春浪の「武俠」及び彼の作り上げた読者共同体についても見ておきたい。

1. 海外への夢、そして武道と野球の中学時代

明治15年(1882年)8月23日、群馬県佐位郡殖蓮村大字上植木の豪農矢島新蔵の三男として矢島保治郎は生まれた。生家は時代により浮沈はあったものの、祖父屯次郎が農業の傍ら座繰機枠の製造販売と質屋で財をなしたため、裕福な家庭環境で育つことができた。保治郎は3人兄弟の末っ子で、幼少の頃より剛毅かつ勝ち気で奔放な性格をそのままに成長し、また周囲にもそれを愛で

ていた⁽³⁹⁾。残された数多くの写真に写る彼は見得を切っているものも多く、些か顯示欲も強かったようである。また少年の頃から単身で猟銃を携えて山に分け入り、獲物を仕留めて来るといったこともしてのける如き秀でた運動能力を備えていた。

この矢島少年は早くから強い海外志向を示していたのだが、それは彼の育った前橋という土地とも関係があるように思われる。同地は幕末からの製糸業や絹織物業で財をなす者を多く輩出している。開港直後から横浜で亀屋原喜三郎のように生糸貿易に携わる者が出てきており、そうした人物の中から直接輸出で海外に進出する者、あるいはより業務を拡大するために銀行設立に関わる者といった発展を見せた⁽⁴⁰⁾。またこうした貿易などを通じた世界との取引が行われる環境は、内陸部にあってもそこで育つ者達に海外雄飛の意識を持たせるものであった。矢島の親族にもアメリカで商業を営む者も多く、そのうちの一人、叔父の竹沢清七はシカゴで日本茶と陶器の販売をしており、彼に最も身近な存在として海外志向の意識を芽生えさせた（浅田、前掲19頁）。彼はこのように恵まれた環境で育ったのであった。

1897年に彼は県内のエリート校である前橋尋常中学に入学した。しかし校風も伝統的に荒く、その中で負けん気を出してさらに暴れていた。その一方で勉学に精を出すわけでもなく、剣道と野球に没頭してしまった。結果、落第を繰り返し、窮余の策として沼田分校に移ったまではしたが、その後進学に自ら見切りをつけてしまった⁽⁴¹⁾。退学後、一年半ほど伊勢崎の自宅から前橋まで意気揚々と馬で通い、公会堂で英語を学んでいた。そして特に家業も手伝うわけでもなく日々を過ごしていた矢島は一念発起し、明治35年（1902年）12月に地元高崎の第15歩兵連隊に下士官候補生として早期志願で一年早く入営した。

同郷の作家浅田晃彦は彼の育った伊勢崎を「上州の中でも気性の荒い土地柄」としているが、それと同時に「当時の気風として誰もが甲種合格を望み、三年間の入営生活を送ることを誇りとしていた。兵役の義務を果たした者が一人前と扱われる」尚武の気風溢れる土地だともしている⁽⁴²⁾。学校において武道が盛んであったことは言うまでもないが、彼を取り巻く環境は軍人に篤く、また日露間の情勢が国内のナショナリズムを刺激していた時期であった。兵役のことを考慮すれば、将来を束縛されるものの昇進も早く活躍も出来る下士官候補生志願は彼の気風に合っていた選択だったのだろう。浅田によれば、彼は

自尊心が強く追従が下手であったため古参兵にいじめられたとのことだ⁽⁴³⁾が、そういう圧力に対しては強靱な精神力を発揮したという。そして翌1904年には日露戦争に従軍し、金州攻撃や激戦地二〇三高地攻略で名高い白樺隊に参加して生き残り、それらの戦功で短期間に軍曹まで昇進し、さらに功7級金鵄勲章を授与され英雄となったのである。

2. 海外雄飛と国権伸張を目指すナショナリズム

時代は10年ほど遡る矢島が前橋中学に入学した頃の黒岩涙香による言説がある。

「(略) …即ち海国男児の気象 (ママ) なかる可からず、海国男児の気象とは何ぞや、冒険の気象即ち是なり… (中略) …海若し我れを遮らば我れ陰を冒してその海を渡らざる可からず、渡りて海の外にまで関する大事業を求めざる可からざるなり、」(黒岩涙香「冒険の事 (海国男児の心掛け)」『萬朝報』明治26年4月14日付⁽⁴⁴⁾)

この中で涙香は、かつて江戸時代の鎖国体制にあっては四面環海的地勢を恃んで安逸を貪り、その冒険の気性を失うことによって「大和民族一般に気萎え魂衰へ、世界中の最も臆病なる尤も小膽なる尤も冒険の氣に乏しき蛆虫一般の物たるに至らしめる」と喝破し、英国が「今は世界第一の最大有為の民と為り、世界中に植民地を有し、英国の版圖内に日の没する事なしと誇称する迄に至れる」ことを賞賛して「冒険の氣を発する時は海国の民ほど大事業をなす者はあらず」としている。

矢島が思春期を送った明治20年代後半から30年代は、まさに日清戦争後に日本の国内社会の政治潮流が変化していく過程と一致していた。日本は下関講和条約によって台湾の領有に成功し、そこから国際社会を見る視点が南洋方面に展開するようになっていた (南進論)。同時に国内における意識もそれにつれて変化するようになり、かねてより推奨されてきた海外雄飛の気風⁽⁴⁵⁾に加えて、海外進出によって成功の機会を手にしようとする気運が生まれていた。「自由民権の時期を経、立憲政治を確保し、いよいよナショナリズム発揮の時代になって、つよい国民的欲望となって出て来たのは、むしろ自然のこと⁽⁴⁶⁾」だった。その意味で矢野龍溪の『浮城物語』や末廣鐵腸『政治小説 大海原』などの海洋政治小説において、素朴な国権伸張論は自明のものであった。そし

てそこで活躍する主人公は「国を憂える海外飛躍型ヒーロー」で⁽⁴⁷⁾、それが海洋冒険小説の骨格となって次代に継承されていったのである。

このことは、明治28年頃から日本人の南洋探検がさかんになっていくことからもうかがえる。この時期は世界中の「無主の地」を「発見」して地図に書き込むために、世界各国の探検家が先を争っていた時代であった。日本の新聞でも毎日のように未知の土地に派遣された探検記や探検家の講演内容が掲載された。言わば探検家は英雄であったのだ⁽⁴⁸⁾。こうした英雄は、数多の模倣者を生み出し、彼らもまた異なった文脈の中で自らを英雄になぞらえていくのである。

もともと海外志向を持つ契機に事欠かない環境に育っていた矢島少年は、こうした社会の潮流の中でより強くそれを意識するようになっただろう。退学後、無為に見える二年間を前橋教会通いに費やしているのだが、海外雄飛の意識が低下したわけでもなかったことは、早期除隊後の行動を見たらわかる。さらに小中学時代を通して鍛錬した剣道と、中学時代に没頭した野球、そして教会においてキリスト教と接したことが、後に影響を与えたように思われる。

3. 押川武俠世界の形成と「読者の共同体」⁽⁴⁹⁾

矢島少年が中学で進級に失敗して沼田分校に編入を余儀なくされた頃、彗星の如く現れたのが押川春浪である。彼は少年小説家の巖谷小波の元に持ち込んだ『海底軍艦』が評価され、『海島海洋奇談 塔中の怪』などの武俠物を次々と発表し、時代を代表する人気作家として活躍した。

これら少年小説は政治小説における海洋小説などの枠組みを受け継いでいるとされるが、そうした観点に拠った場合、徳富蘇峰の政治小説批評が興味深く見えてくる。柳田の紹介に従うと、政治小説は「第一、殊裁の不殊裁 第二、脚色はあれどもなきが如し 第三、意匠の變化少なし 第四、書ひて穿たず 第五、俗物の共進会⁽⁵⁰⁾」と徳富は指摘しているが、これらの多くが押川春浪小説群に当てはまる。それは政治小説作家が文学者ばかりではなく実務者も多かったことにもよるが、その目的が大衆の啓蒙と動員にあったことが大きい。文学的視点からすれば瑕疵にもなりうるこれらの特徴を少年小説は受け継ぎ、そして押川は我が物として使っていたのである。そしてその動員と啓蒙の空間が「読者の共同体」と考えるべきだろう。

「読者の共同体」とは鈴木康史が、春浪編集の雑誌『冒険世界』とその読者たちの間に作られた仮想空間とその機能について指摘した概念である。これまで春浪を文学者として評価する視座のみだった。これに対して佐藤勝は春浪が「文学の外に出た」存在であるとし、文章を書き運動会を開き雑誌を編集することで何をしようとしていたのかという、「実行者」として見る視点を提示した⁽⁵¹⁾。さらに池田浩士はそれに、イデオログ（実行者）春浪を主体的な読者側に対置して、彼が読者たちの希求をすくい上げるという読者側からの働きかけを組み込んだ⁽⁵²⁾。ただしここに鈴木はイデオロギーと春浪の役割が必ずしも一致しないことを指摘する（鈴木、22頁）。よって読者の欲求をすくい上げて反映させる役割であるならば、媒介＝メディアというべきだとする。しかしこれはまたイデオログ春浪の主体性が見失われることになりかねない。そこで読者側の希求の検討に入る（鈴木、22頁）。

春浪の冒険小説に共通する特徴として、戦闘場面も淡泊であり敵の滅び方も弱者の憎しみを反映させるものでもない。むしろその戦いの中で邂逅する「肝胆相照らす」友の存在に焦点が当てられ、またそれが連鎖して友の輪が広がっていくことに特徴がある（鈴木、25頁）。そこでの友とは、巨悪に立ち向かう豪傑である。その豪傑の輪に読者を参加させることが、読者共同体へのしかけなのである。「あなたがた読者もまたこうした英雄たちと同じまなざしを持つ英雄であるから、詳細を語る必要はないだろうと。春浪の小説はこうして読者を巻き込んで」（鈴木、26頁）現実と物語を地続きにしたのである。

ではその豪傑になる手段はなにか。それはただ「武侠」であることなのである。明快で単純な精神と、それを体現する男らしい「壮」や「快」といった文字を繰り返し使い実践していくことなのである（鈴木、30頁）。読者同志が互いに「武侠」的言辞と実践を行っていることで、まだ見知らぬ仲でも一瞬にして「肝胆相照らし」て友となれる。そのための場が雑誌の投書欄であり、その中で互いに呼びかけ合うようになった読者は、自ら豪傑になるための実践を現実世界に持ち出すべく様々な呼びかけを行う。それは主に冒険倶楽部や運動会などの活動といった、非政治化された〈青年〉の実践であった⁽⁵³⁾。

この鈴木による構造は、いわば先に揚げた徳富の政治小説の持つ欠陥を、読者に主体性を持たせることで活性化させていったものだとも言えよう。例えば主人公や場面の設定が平板であっても、それは明快さと「ドリル」という役割

に転化できるし、俗物の共進会は雑誌への希求を揃えていくことで共同体の充実となる。佐藤の指摘するとおり、政治小説と同様文学専門家ではない者が作者として活躍する場であるからこそ、こうした場を作りえたのだろう⁽⁵⁴⁾。

また加うるに、運動の一つとしてこの頃には旅も数えられていた。「無銭旅行」も、一部江戸時代から引き継ぎつつ、明治維新で藩界が取り払われてから一気に国内の人口流動は増えると同時に、青年が自らを試す風潮の中に成立した旅行様式である。例えば山田寅次郎が幸田露伴らと急に思い立って、厳冬に上野から徒歩で宇都宮、さらに山梨を過ぎて駿河湾まで巡って帰ってくるといった破天荒な旅⁽⁵⁵⁾などをする者もいた。そして太平洋航路が開設されると、そういった人々は海外を目指すようになった。南進論が意識される明治30年代になると、力行会の雑誌『救世』の報告にも見られるように、当時の学生や若者が徒手空拳で乗船し現地の居留民宅や仕事場に転がり込むといったことが頻発した⁽⁵⁶⁾。つまり無銭旅行という冒険は、青年達に修養の実践として共有されており、一方で政治小説の持つ啓蒙性や動員性を受け継いだ少年小説が、さらに単純明快な体現すべきモデルとして武侠世界を提示し巻き込んでいったのだと考えられる。

第3章 押川武侠世界と交わる

「明治四十二年二月三日新橋停車場出発。プラットホームにて都下新聞記者の来訪を受く。横浜着数流の幡多に送られて徒歩棧橋繫留讃岐丸に乗船、時に午前十一時三十分。船上にて福島県綴駅在勤竹馬の友田口応吉君の祝電を手にする。船室に背囊携帯品を置き便所へ赴く途中又も新聞記者の擒となり、訥弁の僕大いに窮す。(以下略)」(「世界無銭探検記 上海よりの第二通信」『上毛新聞』1909年3月11日付)

矢島は筆まめであったが、文才豊かというわけではなかった。日記などを見ると、事実を書き留めることは出来てもそれをまとめて読み物とすることには苦労したようだった。上記の掲載記事にはその特徴が出ており、無駄な装飾語はなくほぼ単文で構成されている。おそらくこれは軍隊で慣れ親しんだ報告要領に由来するものであろうが、自ら宣伝しておきながら記者に捕まって「訥弁の僕大いに窮す」と人見知りの一面をそのまま書いている所も興味深い。

ここでは矢島の計画と出発準備を整理し、それをもとに先の鈴木康史の読書共同体との位置関係を見ながら矢島の出発段階の意図を探ってみたい。

1. 矢島の冒険準備に見えるもの

無銭旅行というものは、一般に出費を極力抑制して旅行期間と距離を延ばすことに主眼が置かれている。そこにはそれぞれの旅行者自身の工夫が反映された様式があるものだが、単独渡航経験のない矢島は机上の学習と想像の上で一から作り上げなければならなかった。彼がこの冒険旅行の準備に取りかかったのは、日露戦争から凱旋帰国後のことであった。陸軍戸山学校入学を命ぜられたのを機に、鬱勃として沸いた冒険旅行への志を実現すべく「狂気を装う」という非常手段に訴えて早期除退を果たした⁽⁵⁷⁾。そして日を置かず、海外渡航の手法を学んだり同志や支援者の人脈を作ることを目的に、日本力行会⁽⁵⁸⁾に入会したのだった。

彼の当初の目的は中国から北米を目指して無銭旅行することに置かれていたので、米国に多くの拠点を持ち苦学生の支援を行っている力行会は目的に合致していたのであろう⁽⁵⁹⁾。またキリスト教を母体としている点⁽⁶⁰⁾、そして会長の島貫兵太夫を中心として悪徳斡旋業者から移民を救済する社会運動を行っている点が彼の目に好ましく映ったのかもしれない。力行会としても、アメリカで日本人労働者排斥運動が起こったことで日米間の渡米移民制限協約が成立し、そのため会員が激減して経営難に陥った時期であった。この時期、アジア方面にその進出先を広げようとしていたためか、趣旨の違う彼でも受け入れてその活動を許している。以下、矢島の旅行準備項目毎に整理と評価をしたい。

矢島はまず会内に私設の「冒険倶楽部」を作り、自ら隊長と名乗って同志を募ることから始めた。この「冒険倶楽部」には当初約30名が参加したが、力行会に所属する会員の多くが苦学生や渡米志願者⁽⁶¹⁾であったため、彼の壮大な計画に興味を持っても冒険への同行者は集まらなかった。(浅田、28頁)。ところでこの「倶楽部」という同好の士を集める手法であるが、当時一般的であったとは言え、名称といい募集の仕方といい『冒険世界』の読者共同体に共有されるものと似通ったものがある。

次に資金作りである。最低限の移動と宿泊にかかるであろう旅費は準備しなければならない。ことに未開の地へ入るため、物々交換や現地での行商に使い

る品物を選定していたようである。また携行品には護身用の短銃も加えられていた。資金のほとんどは自己資金で、金鶏勲章の年金証書を担保に借金したり実家の相続分田畑を売却してもらう算段をすることを父新蔵に無心するなどして集めた。残念ながら資金計画の資料がないので詳細はわからないものの、現地で稼ぐ無銭旅行であるので、柔軟に対応出来ると考えていたのではなかろうか（浅田、29頁）。

そして最も大切なのが計画作成である。倶楽部を設立してしばらくは同行候補者が数名おり、彼らを交えて会議を重ねていたという（浅田、32頁）。彼自身も帝国陸軍軍曹であったから、都市部や交通手段が保障されている地域であれば慣れたものであったろう。しかし今回に関してはそういった地域はせいぜい西安までである。その先は先人の記録などを収集するより他はない。現代の旅行者の多くがする如く、先人の残した記録や物語を後から追体験する方法をとることは有効だろう。しかし日本でチベットに関する情報を持つ者は、当時河口慧海と寺本婉雅の二名のみである。寺本の場合は、矢島の予定入蔵ルートと一致する部分もあるが、最も不安定な東チベット地域に関する情報は皆無である⁽⁶²⁾。また力行会に近い牛込に居を構えていた押川春浪とは、ここで初めて面識を得たのだった。幾度か押川宅に遊び、カメラの贈与などを受けているので、おそらく計画作成にもアイデアを出して貰ったのではなかろうか。

とはいえただ単に冒険だけを志したり、特定の地域を目標に計画を立てるならば良いが、そこに別の価値を加えると歪みが生じてくる。少年の頃の写真をみると、その頃から些か自意識過剰な様子が窺えるが、この旅行に向けた彼の服装は赤と青のジャケット、乗馬用長靴、弾帯、中折帽そして長髪に口髭とそれだけでも異様である。さらに背囊には「世界は我家」と書いてあるのであるから、かなりのかぶき者である。こうなってくると小説の世界を強く意識していると判断せざるを得ない（浅田、36、44頁）。

それに関連して4つめが宣伝である。自ら新聞社に記事を持ち込んだりしているのだが、無銭旅行者の多くが公表しないのに対して、彼のこうした意識は、いわゆる「探検」かもしくは「興業」に近いと言える（浅田、31頁）。実際、矢島が準備の終盤にかかっている頃、スヴェン・ヘディンが訪日して東京で講演会を⁽⁶³⁾行っているの、そういったイメージも加わったかもしれない。ここまで見てくると、彼の基本的な「無銭旅行」像は大キャラバンを組ん

で未開の地に華々しく挑む大探検家か、それとも借り受けた写真機で記録を遺し、あたかも小説の世界を自ら体現して来たるべき小説の主人公に相応しい姿であることを意識したのか、様々な可能性が考えられる。第1章で見てきた通り、彼の当初の目論見は現地社会と自らの能力という大きな壁によって変形させることを余儀なくされたのであるが、その原因はこの準備段階において既に現れていたと言って良い。言わばイメージ先行の「自己演出型」冒険様式であったと考えるべきだろう。

2. 読者共同体の外に位置しながら「肝胆相照ら」した矢島と押川

既に雑誌『冒険世界』においては、読者投稿欄という場で、押川を中心（結節点）として読者同士に広がる「読者の共同体」が構築されているとする鈴木⁶⁴の言説について紹介した。押川は互いを「肝胆相照らす」存在と認め合う「想像の共同体」を積極的に活動の場にし、読者を巻き込んでいった。読者がその共同体に参加するには、「武侠」的实践、すなわち豪傑用語を使うことや武士道精神を磨くことで互いの豪傑性を認められれば良いのだ。そして雑誌投稿欄という「想像の共同体」から、運動会などに参加することで「実在の共同体」への志向を具現化していったとする。ここで重要なのは、概念上は作家と作品、そしてそれを支持する読者は等しく豪傑である。しかし押川が皆の希求をすくい上げる位置におり、つねに豪傑を体現していなければならないという作家と読者の上下関係が出来上がっていることである。おそらく鈴木が最後に指摘する「彼が抱え込むイデオロギーと、彼の行おうとする現実の実践は、否応なく乖離していく⁶⁴」のは、そこに原因があると思われる。

では矢島の場合はどうであったろうか。実は彼はほとんど「武侠」的实践となる表現を残していない⁶⁵。それが軍隊における報告要領の教育によるものなのか、もしくは少年期より彼自身がそういった表現に価値を見出さなかったのか資料の検討が十分でないため判断できないものの、準備が完了したその姿は、押川の世界における豪傑性を具備するための「奇矯」な振る舞いに通じるものを見出すことができる。つまり『冒険世界』の読者共同体に属していないが、押川とは意識を共にしている（「肝胆相照ら」している）、ということができまいか。

実際、矢島の持つ資質は押川のそれと親和性が高い。すなわち少年期の記憶

と社会人としての実績である。前者に関しては、武士道と野球、そしてキリスト教への共感である。押川の武侠精神の根源は、「弱きを扶け強きを挫く」勧善懲悪的に単純化された武士道である。中学時代に剣道に没頭していた矢島にとっては、違和感のない感覚であろう。また野球、広く言えばスポーツについても同様の経験をして、両者ともそれによって落第している。キリスト教については宗教家を父に持つ押川の方が上手であろうが、実際それに根差した頑固さを持っている。以下は押川の文章である。

「今日我国に冒険的精神の隆興せし事は歎ぶべき現象なれど、同時に区々たる小人鼠輩が、冒険の名を騙って、兎戯に類する愚劣事を為すは苦々しき次第なり。或は虚名を貪らんが為め、或は喰へざるが為め、或は勤勉を要する学事又は事業に堪えざるが為め、名を勇壮なる冒険に仮って、世人を瞞着し、私欲を充さんとする者あり。余輩は斯かる鼠輩の面を見る丈けにて嘔吐を催す⁽⁶⁶⁾」

また、「冒険に二種あり、一は真善美の冒険なり、他は偽悪醜の冒険なり⁽⁶⁷⁾」という言葉説に表れているように、その根本にキリスト教者であることと生来の潔癖さを兼ね備えていることは見逃せない⁽⁶⁸⁾。

もう一つが社会人としての実績で、矢島から押川を見れば自分の好ましい世界観の体现者である。一方、押川から矢島を見てもナショナリズムを実践し戦争で勲章を受けた人物である。ここに互いに対する畏敬が生まれたと思われる。というのも、「偽冒険家」の文章は「ここ二三年」と書かれており、それはまさに矢島が押川宅を訪れていた時期に当たるからだ。島貫兵太夫の紹介ということもあったであろうが、それだけでカメラを贈ることはなかろう。なぜなら軍人や勲章でのみ受け容れるほど押川も柔弱ではないからだ⁽⁶⁹⁾。そして二人に共通することは、奇矯を好むということだろう。「奇矯」が豪傑性を証明するものなら、二人は間違いなく豪傑となるのだ。

おわりに

19世紀後半、世界は「探検の時代」と言われ、各所で探検家たちが先を争っていた。その時代、彼らはまさに英雄だった。そして日本人も探検に参加するようになり、その約10年後から冒険小説の時代が始まる。当時の若者達は小説

に夢中になり、自分もいつか海外に行く夢を持った。ちょうどその時代に生まれた二人の男は、一人は小説家になりもう一人は軍人になった。二人が出会うのは20世紀になってからである。しかし歩んだ道は違えど二人は同じ時代の気持ちを持っていた。世界一周をするために軍人を退役した男は、自分が昔読んで小説の主人公になろうと考えた。そして紙の上で冒険している小説家は、元軍人に世界を見てくれるようカメラを渡した。

彼は、出発前に計画を準備する期間、予備訓練もしていない。恐らく移動には自信があったのだらうと思われる。しかし生活面での知識や技術は心理状態も含めて全く足りなかった。彼が計画時に最も気にしたのは、資金と投宿先だった。確かにそれらが旅行中は常に問題となって降りかかってきた。矢島の旅行における第1期と第2期は、彼にとっては想定外のことが多く挫折と反省、そして修正の連続であった。けれども現地で一番壁になったのは、同胞によって形成されている現地の日本人社会が、奇矯な人物を日本人社会が受け容れなかったということだろう。北京で、矢島への忠告だとして「働クニシテモ先ヅソノ髭ヲ剃リ、頭髮ヲ普通人ノヤウニ」と、豊島に投げつけられた言葉は、それを示唆している。また、矢島は成都で「日本社会の有様は、他人に関する批評は頗る苛烈にして、むしろ他を傷つけ其失敗を喜ぶの気風有り⁽⁷⁰⁾」とする文章を残したが、これも潜在的に豪傑であることを自認する奇矯者への無理解に対する怒りとも読める。しかし結局、頼る先を失いやむなく現地により深く降り立つようになったのだ。奇抜な服装を中国人服に着替え、そして口ひげも剃り髪型も現地に合わせたことは、自らの演出を捨てて現実に立ち戻ることを意味していた。

出発時、矢島は自らを演出したイメージの提供者であった押川との間において、作家と読者という関係に縛られることなく、比較的对等な立場でつきあうことができた。それは矢島の文章を見る限り、彼が「読書共同体」に依拠しなかったからだとも言える。言わば「読者共同体」というものはその上下の関係性を残しているが故に、押川の求める共同体で独り押川だけが奮闘する構図になっていたが、実はその枠を外れた人間との間ではそれこそ上下の関係性なく友人たり得た。逆に言えば、読書共同体に属している限りは参加者同志は平等かもしれないが、提唱者は平等になれない宿命を負うということがわかる。しかしながらそのことが矢島の旅立ちにおいて影響を与えたかは今後の研究課題

である。特に彼が徴兵検査を受ける以前の二年間において、どのような言葉遣いをし海外雄飛を語っていたのか、こういった資料を手に入れる必要がある。今後もさらに継続して追う予定である。

ヒマラヤ地域の政治研究を専らにする筆者が長年不思議に思っていたことがある。チベットという土地にいと、とにかく各国から個人旅行者が流れて来る。彼らはどこからともなくやって来て、結構な時間をそこで過ごし、そして去って行く。90年代、雪に閉ざされたチベットでは、そうやって年越しした日本人バックパッカーに多く出会った。そして彼らの多くは記録を残さずに自分だけのチベットを抱えてこの世を去って行く。しかしそれだけの日本人バックパッカーが冬のラサに屯していたことを考えれば、もしかしたら現在9名と言われる入藏者はほんの一部でしかないのではないか、という気がした。

この矢島保治郎という人物はそういう旅行者の先駆けになる一人とも言える。しかしバックパッカーについては、これだけ数が増えてもその動態や類型などが十分研究されていないのが現状である。そこで矢島保治郎を取り上げてみようと思ったが、当然100年前の人間である。これまでと研究対象地域も手法も異なるため、全てが試行錯誤と学びの過程となった。そのため2年目となってもまだまだ十分な内容とは言えず、悪戦苦闘中である。ただ調べている内に、最近矢島保治郎の行動が現代のアイドルのサイン会やコミックマーケットに参集する人々と共通するものに見えてきた。少年小説というものは、その後に漫画やアニメ、ゲームにつながっていく世界なのだ。まだまだ矢島が教えてくれることはたくさんあるようだ。しかしともかくここまでは文字にすることはできた。それを導いて下さり、近代日本社会へのアプローチや思考法について相談に乗っていただいた土田宏成先生には心より感謝を申し上げる。また、なかなかまとめられず提出が遅くなっても辛抱強く待って、掲載の場を与えて下さった神田外語大学日本研究所と職員の石崎さんにはお詫びとお礼を申し上げる次第である。

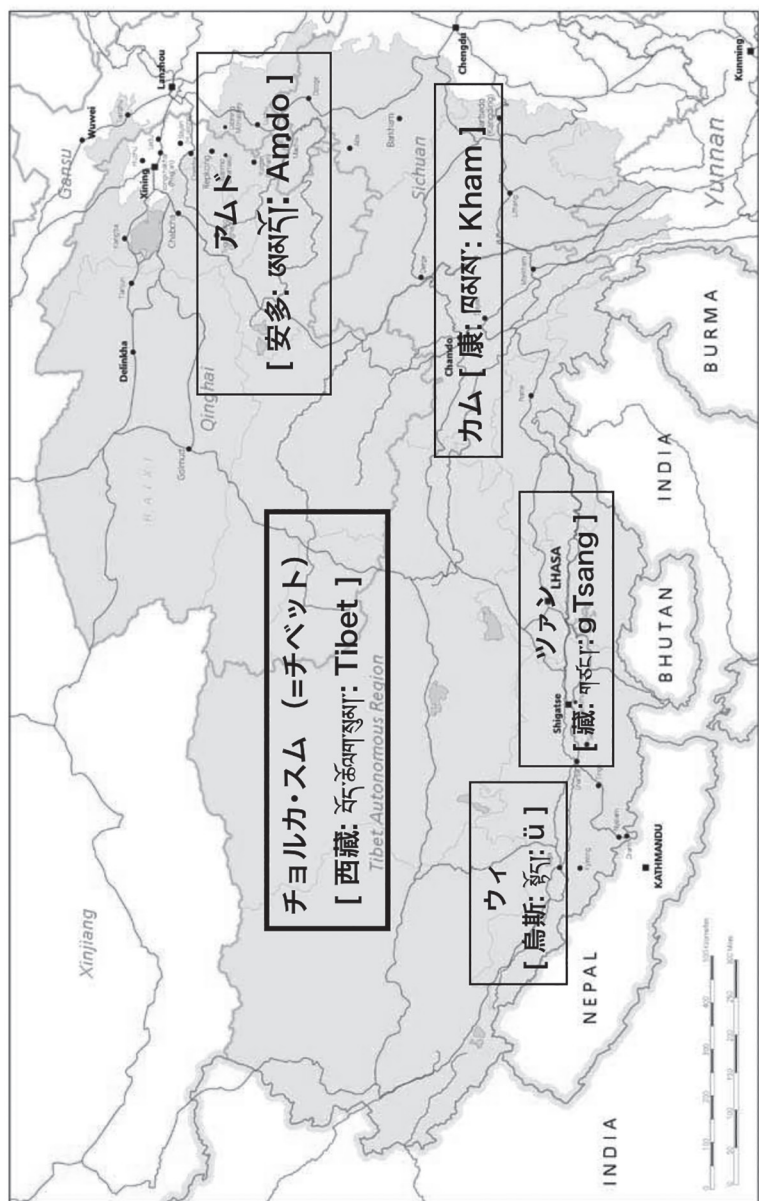
＜矢島保治郎・押川春浪関係年表＞

西暦(年号) 世界・日本・チベット情勢 矢島と入蔵者 萬朝報と少年小説 探検と海外渡航		
1866(慶応2)		海外渡航差許 布告。初の旅券発行
1868(明治元)		日本人移民148名、ハワイ到着
1869(明治2)		スエズ運河と北米横断鉄道の完成
1871(明治4)		
10・22	華族に海外留學周遊を奨励し給へる勅諭	
1874(明治7)	台湾出兵	
1875(明治8)		
5・7	千島・樺太交換条約調印	
6	〈清〉同治帝崩御、光緒帝・西太后	
1876(明治9)	〈英〉芝罘条約	
3・21	◇押川春浪(本名 方存)出生	
1882(明15)		
8・23	○矢島保治朗出生	
1883(明16)		ヴェルヌ『月世界一周』(井上勤訳)
1884(明17)		ヴェルヌ『六万英里海底紀行』(同上)
		鈴木經勲、マーシャル群島探検
1886(明19)	〈藏〉シッキム藩王領侵犯 〈英〉ビルマ・チベットに関する英清条約	
		福島安正陸軍少佐『印度紀行』発表 日本郵船会社設立
9・24		
1887(明20)		
1		東洋奇人『世界列国之行末』(金松堂)
12・25	保安条例	
1888(明21)		《第一次 少年雑誌創刊期》
	条約改正交渉(大隈重信)	
11		『少年園』創刊(少年園発行所)
1889(明22)		
2・11	大日本帝国憲法発布	
2		『日本之少年』創刊(博文館)
7		『小国民』創刊(学齢館)
8		福島安正、単騎シベリア単騎横断
1891(明24)		
1		巖谷小波編集、少年文学叢書刊行開始(博文館)
1892(明25)		ヘディン・第1回探検(〜97)
11・1		黒岩涙香、『萬朝報』創刊(朝報社)
1893(明26)		
3		郡司成忠、千島探検出発
3	○矢島、殖産尋常小学校卒業	
		尾崎紅葉『侠黒兎』(博文館)
6・27		「偽仕士を退治せよ」(『萬朝報』八面鋒)
12		玉井喜作、隊商にてシベリア横断
1894(明27)		
7・16	日英通商航海条約(領事裁判権撤退・関税自主権一部回復)	
8		末廣鉄腸『政治小説 大海原』〈春陽堂〉
8・1	日清戦争(宣戦の詔勅発)	
1895(明28)		日本人の南洋探検さかん
1		『少年世界』創刊(博文館)
4・17	下関講和条約調印	
5	台湾總督府設置	

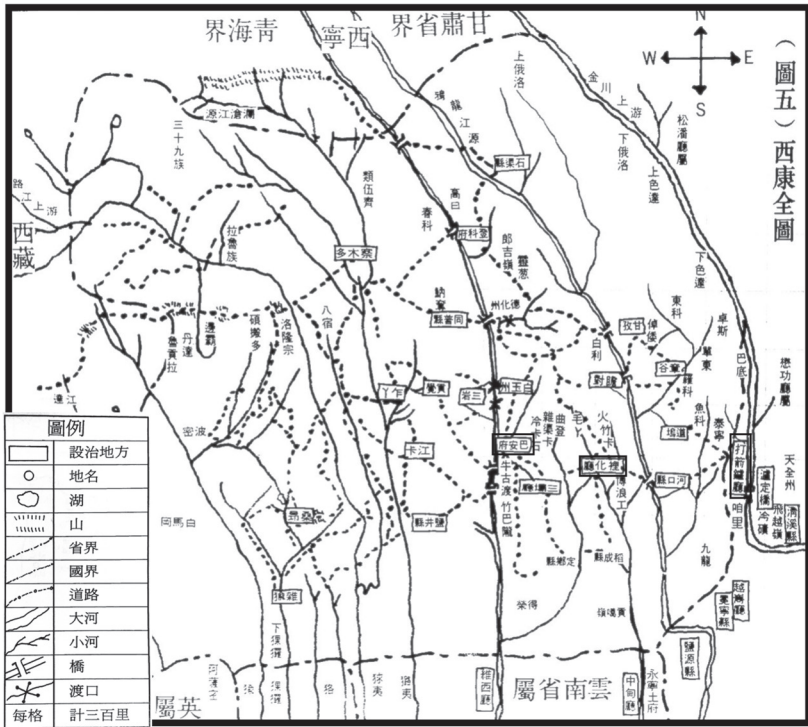
7	尾上新兵衛「近衛新兵」(『少年世界』)
1896(明29)	岩本千綱、インドシナ半島探検
1897(明30)	
1	『少年倶楽部』創刊(北隆館)
1	『海国少年』創刊(東光館)
3	○矢島、伊勢崎町高等小学校卒業
4	○矢島、前橋尋常中学入学
6・26	・河口慧海、神戸港からコルカタ向け出発
1898(明31)	
3・18	蝦洲生「所謂壮士」(『萬朝報』論壇)
	(米)米西戦争、米比戦争
5・5	蝦洲生「青年の外遊を促す」(『萬朝報』論壇)
7・16	蝦洲「俠風論」(『萬朝報』論壇)
8・12	(米)ハワイ共和国併合、米自治領ハワイ準州
1899(明32)	ヘディン、第2回探検(〜02)
3	○矢島、前橋尋常中学退学
5	(清)義和団の乱
8・9	黒岩涙香翻案「幽霊塔」(『萬朝報』連載)
8・11	能海寛・寺本婉雅、巴塘(四川ルート)到着
9	○矢島、前橋尋常中学沼田分校二年次編入
1900(明33)	スタイン、中央アジア探検(〜02)
1	『幼年世界』創刊(博文館)
5	ナンセン、北極海を探検(〜14)
6・15	(清)北清事変
7・4	・河口慧海、入藏を果たす
11	◇押川春浪『海島冒険奇譚 海底軍艦』(文武堂)
1901(明34)	
1	○矢島、前橋尋常中学沼田分校退学
3・18	デュマ「史外史伝 巖窟王(黒岩涙香翻案)(『萬朝報』連載)
3・21	・河口慧海、ラサ到着(〜02)
4・18	能海寛、雲南省大理で消息を絶つ
9	◇押川春浪『航海奇談』(大学館)
10	◇押川春浪『海島探検奇談 塔中の怪』(文武堂)
12・1	・成田安鞠、ラサ到着(〜12・25)
1902(明35)	《第二期 少年雑誌創刊期》 大谷光瑞、第1回中央アジア探検隊
1・30	日英同盟調印
2	◇押川春浪『任侠蛮勇世界武者修行』(大学館)
3	『少年倶楽部』創刊(日本館)
3	◇押川春浪『日欧競争 空中大飛行艇』(大学館)
3	西山渚山『空中旅行家日本人奇談 無人島』(美育社)
10	江見水蔭「無名島探検記」(『少年世界』)
12	◇押川春浪『武俠の日本』(文武堂)
12・1	○矢島、下士官候補生として帝國陸軍歩兵第15連隊第8中隊入隊
1903(明36)	
	(藏)趙爾豐、西康の叛乱を鎮圧。『平康三策』提出
	堺利彦・内村鑑三・幸徳秋水ら萬朝報退社
1	◇押川春浪『千年後の世界』(大学館)
6	◇押川春浪『伝奇小説 銀山王』(文武堂)
12・1	○矢島、陸軍上等兵
1904(明37)	
1	◇押川春浪『新造軍艦』(文武堂)
3	◇押川編「中村春吉談 無銭冒険自転車世界一周」(『中学世界』増刊)

2・10	ロシアに宣戦布告		
3・6	日露戦争動員令		
	○矢島、乃木將軍隷下第3軍に所属。金州攻略・旅順包囲線参加 ・河口慧海、『西藏旅行記』(博文館)発表		
6・22	〈藏〉ヤングハズバンド(英)による武装使節団派遣。ラサ占領		
9	◇押川春浪『武侠艦隊』(文芸堂)		
9・7	〈藏〉イギリス・チベット協定締結		
11・26	○矢島、203高地攻略戦参加。白樺隊 ○矢島、瀋陽で戦闘終了地域の宣撫工作に従事。漢語・露語学習		
1905(明38)			シベリア鉄道完成
1・5	旅順開城		
2・24	・寺本婉雅、ラサに向け青海省クムブ寺出発		
3・1	〈藏〉駐藏幫辦大臣鳳全、巴塘で殺害さる		
3・10	奉天の会戦		
4・1	○矢島、陸軍歩兵伍長		
5・19	・寺本婉雅、ラサ到着(3週間滞在)		
5・27	日本海海戦		
7	〈藏〉趙爾豐、巴塘叛乱を鎮圧 以後「改土帰流」を推進		
8	◇押川春浪「秘密国探検〈阿富汗斯坦の八年間〉」(『中学世界』連載)		
9・5	日露講和条約調印・同日、日比谷銃討事件		
1906(明39)			ヘーデン、第3回探検(〜08)
1	『日本少年』創刊(実業之日本社)		
1	アンステイ(黒岩涙香訳)「おやおや親」(『萬朝報』)		
4・1	○矢島、陸軍歩兵軍曹		
4	〈藏〉チベットに関する英清条約		
4・23	○矢島、陸軍戸山学校へ武道師範として転任		
5	◇押川春浪「探検小説 印度怪譚」(『探検世界』)		
7	◇押川春浪「世界廻り滑稽新婚旅行」(『写真画報』)		
10	〈藏〉張荫棠、ラサ九局暫行章程發布		
1907(明40)			米国の日本移民排斥運動
7	◇押川春浪『絶海軍艦』(本郷書院)		
7	◇押川春浪『冒険探検奇男児旅行』(本郷書院)		
12	○矢島、帝国陸軍除隊		
1908(明41)			第1回ブラジル移民
1	『実業少年』創刊(博文館)		
1	『冒険世界』創刊(博文館)		
1・10	○矢島、上京し日本力行会入会。翌月「探検倶楽部」設立		
3	『少年倶楽部』創刊(少年倶楽部社)		
6	◇押川春浪・阿武激浪庵『海軍的壮快譚水天一髪』(本郷書院)		
8	〈藏〉ダライ・ラマ13世、外蒙古、青海省を経て五台山へ		
8	◇押川春浪・中村直吉『亜細亜大陸横行』(博文館)		
8・2	〈英〉ペルシャ・アフガニスタン・チベットに関する英露協定		
9	〈藏〉ダライ・ラマ13世、北京着(〜12月)。西太后に謁見		
11	〈清〉光緒帝(14日)、西太后(15日)相次いで崩御		
1909(明42)			
1	◇押川春浪・中村直吉『南洋印度奇観』(博文館)		
2・3	「		○矢島、「世界一周無銭旅行」に向け、横浜港出発
2・7	1		○矢島、上海着 東亜同文書院、群馬県人会他訪問
3・23	期		○矢島、武昌着 武昌陸軍軍官学堂。葉の行商
4・11	「		○矢島、北京着 洗濯屋。川島浪速他
7			◇押川春浪「武侠小说 万国武者修行」(『冒険世界』連載)

8		◇押川春浪『中村春吉自転車世界無銭旅行』(博文館)
9・10	「	○矢島、成都着 陸軍連成士官学堂、測繪学堂体操武道師範
11	〈藏〉	グライ・ラマ13世、ラサ帰着
1910(明43)	2	橋端超、中央アジア探検(〜08)
	期	○矢島、重慶滞在
2・12	〈藏〉	趙爾豐率いる四川軍、ラサ占領。グライ・ラマ13世インドへ脱出
3	「	◇押川春浪・中村直吉『鉄脚縦横』(博文館)
7・11	「	○矢島、タルツェムド(康定)着 イーヤンラマ再会
11		◇押川春浪・中村直吉『阿弗利加一周』(博文館)
11・12	「	○矢島、イーヤンラマの隊商員として、ラサに向けタルツェムド出発
1911(明44)	3	
1	期	◇押川春浪「偽冒険家を痛罵す」(『冒険世界』)
3・4	「	○矢島、ラサ到着
4・3		日米新通商航海条約改正(関税自主権回復)
4・3	4	○矢島、カルカッタ向けラサ出発
5	期	○矢島、カルカッタ到着、駐コルカタ領事平田知史宅に寄寓
	〈藏〉	趙爾豐、四川總督。傅嵩秋、川滇邊務大臣
9	「	○矢島、英国籍貨物船火夫としてコルカタ出発
10	辛亥革命勃発	
10	5	◇押川春浪『破天荒』(博文館)
12	期	アムンセン、スコット南極点到達
1912(明45)		
	〈華〉	孫文、臨時大總統就任。中華民国建国
1		◇押川春浪『武侠世界』創刊(興文社)
1・23		白瀬藏、南極大陸上陸
2・12	〈清〉	宣統帝溥儀退位、清朝滅亡
3	「	○矢島、帰国。力行会島貫兵太夫他と会見、2日後コルカタに向け出発。
6	6	○矢島、コルカタ着
7・23	期	○矢島、ラサ着
(大正元)		
9・22		・青木文教、入藏(〜1916・1・26)
1913(大正2)		
9・28		・多田等観、ラサ到着(〜1923・2)
10	シムラ会議(英・華・藏)	
1914(大正3)		パナマ運河完成
1		『少年倶楽部』創刊(講談社)
7	第1次世界大戦勃発	
8・7		・河口慧海、第2回入藏ラサ到着
11		『新少年』創刊(平和出版社)
11・16		◇押川春浪、死去
1915(大正4)		
1		○矢島、河口・多田・青木らと正月
1917(大正6)		
	ロシア革命(二月・十月)	
1		『海国少年』創刊(海国少年社)
7		『少国民』創刊(東京浩洋社)
1918(大正7)		
8	シベリア出兵	
10	「	○矢島、妻ノブラー、長男意志信と共に帰国の途につく
11	第1次世界大戦終結	
1919(大正8)		
1・19		○矢島、一家と共に帰国

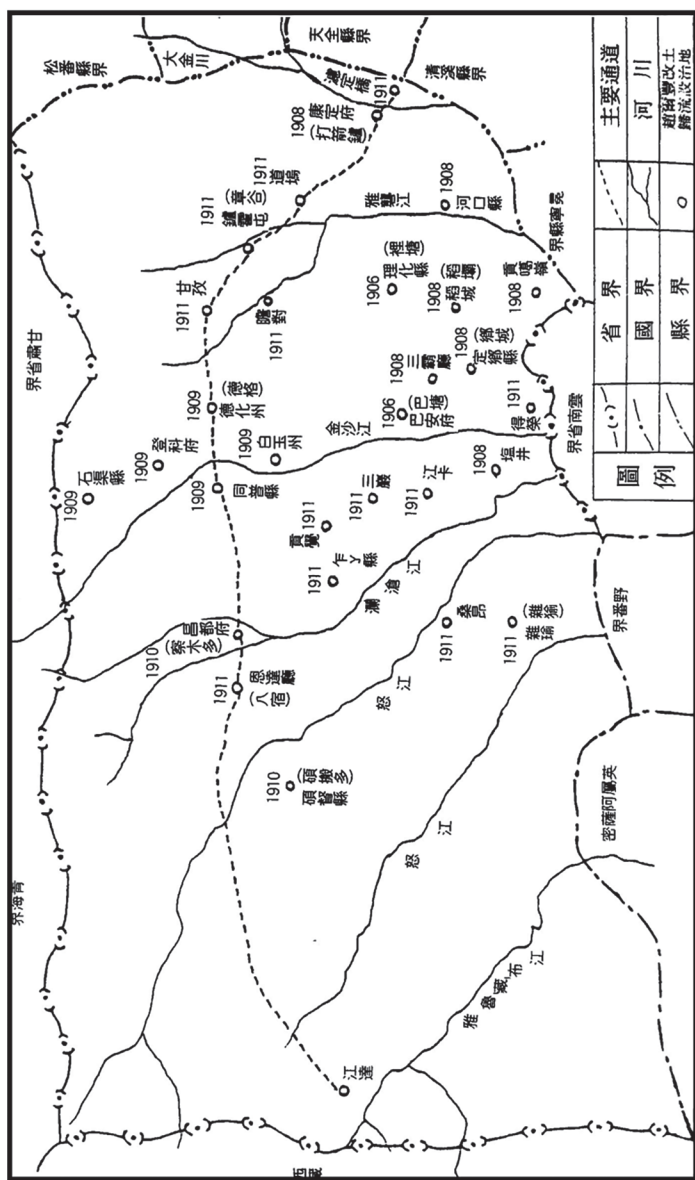


〈地図-1〉チベット全図と各地方の名称
(<https://www.hrw.org/legacy/pubweb/TibetMap.html>) を元に作成

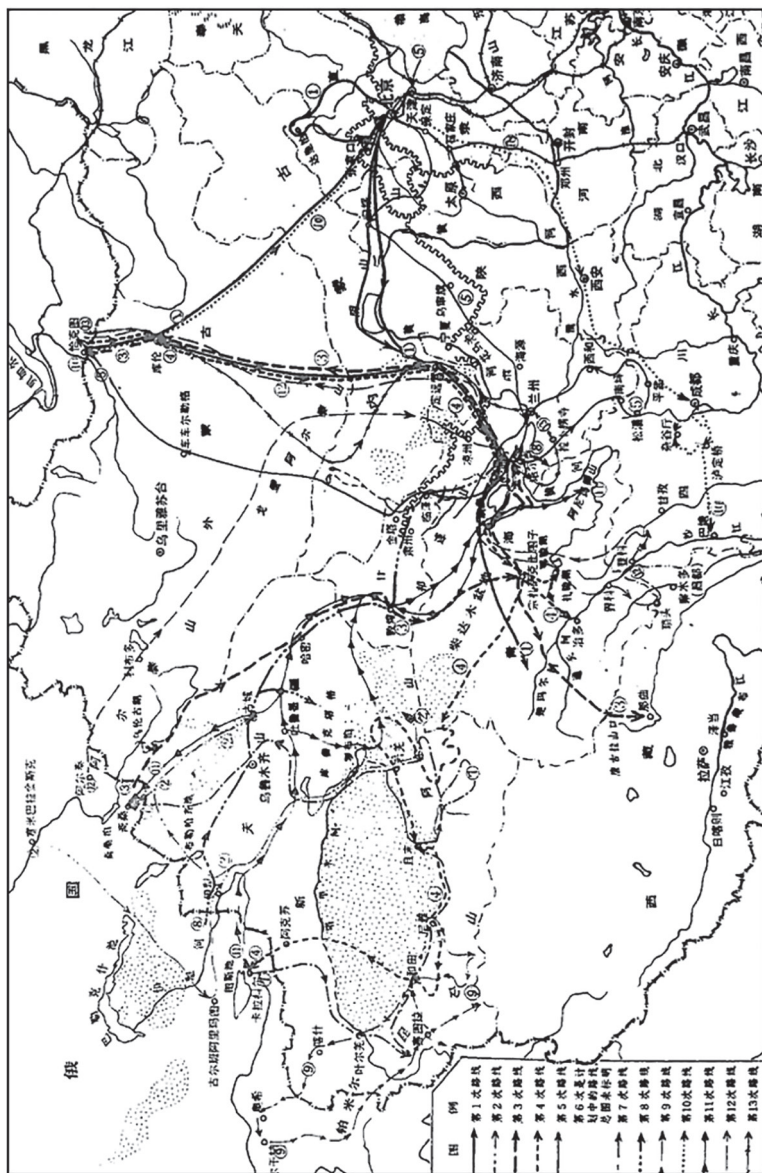


〈地図-2〉西康全域図（原名：「西康全圖」）

出典：馮明珠著『近代中英西藏交渉與川藏邊情』國立故宮博物院印行、1996年、504-5頁。本地図は1913年出版高勞「西康建省談」の付図より馮が模写したものである。西康（川邊）地区は、東西は四川省康定（古名：打箭爐）の折多山頂からチベット自治区丹達山、南北は英領インドと雲南から俄洛色達までの地域を指す。中央を流れる金沙江を境に四川側には早くから中華世界の政治権力が及んでおり、1914年のシムラ会議においても英清間でその境界が争われた。



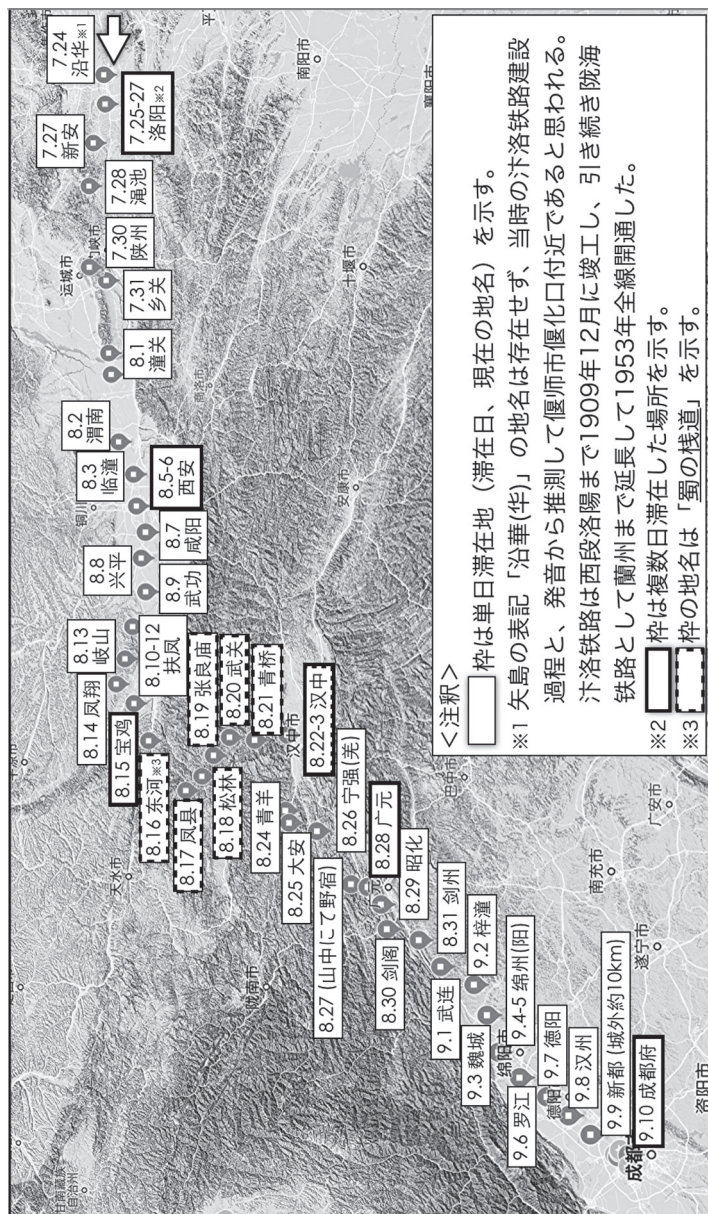
〈地図-3〉四川辺境地域境界図（「原名：川邊境界略圖」）
 出典：馮明珠著『近代中英西藏交渉與川藏邊情』國立故宮博物院印行、1996年、515頁。1919年12月31日に北京衆議院議員李寶楚が提出したもの



(地図-4) 帝政ロシアによるチベット探検隊工程図(1次:1870年-13次:1909年)
(出典:王遠大著『近代俄国与中国西藏』三联书店1993年)



〈地図 - 5〉 矢島保治郎 第1回入藏経路 (全行程：上海～康定)



(地図-6) 矢島保治郎 世界無銭旅行第1回入藏 (第2期行程 徒歩区間 沿華(僵化)~成都)

註

- (1) 「世界無銭旅行者の出発 矢島保太郎氏と語る」(明治42年2月4日付 東京朝日新聞)
- (2) 「朝貢システム」として東アジアにおいて階層的な封建的国家関係を形成していた。坂野正高『近代中国政治外交史：ヴェスコ・ダ・ガマから五四運動まで』(東京大学出版会、1973年)
濱下武志『朝貢システムと近代アジア』(岩波書店、1997年)
- (3) 開高健、田村隆一、長沢和俊編『「人はなぜ旅をするのか」 19世紀の探検レース』(日本交通公社、1982年)
- (4) チベットはチベット自治区ラサ市を含む中央地域東部のウ(烏斯：ཨ་ཁོང་ལྷོ་བོད་：Ü ただし古称では衛：དབུས་dBus) とシガツェのある中央西部のツァン(藏：གནའ་མོ་gTsang)、そしてチベット自治区昌都市から四川省西部及び雲南省北部を含むカム(康：ཁམ་མཁའ་Kham)、青海省と甘肅省甘南と天祝から四川省北西部からなるアムド(安多：ཨ་མདོ་Amdo) の3州(ボツ チョルカ スム：བོད་ཆོས་ཀྱི་པར་ལྟར་bod chol kha sum) からなる。また清朝の記録においては現在のチベット自治区昌都市江 から四川省康定市までの地を川辺(四川辺境)と呼称し、民国期にその地域を西康省を設置した。(地図-2) 参照。
張云俠 編 王輔仁 校注『川邊歷史資料叢書 康藏大事紀年』(重慶出版社、1984年)
- (5) ロシア探検隊については、後にグライ・ラマ13世の側近となるドルジーエフ(Агбан Лобсан Доржиев：འག་བཤེད་ལོ་བཤེད་ཐོ་བཤེད་) やコズロフ(П.К. Козлов) らを含めて13回にも及ぶ科学調査隊派遣が行われた。(地図-4) 参照
王遠大『近代俄国与中国西藏』(三联书店、1993年)
- (6) 河口慧海がインドのダーージリンでチベット語を学んだチャンドラ・ダース(Sarat Chandra Das) など。なおパンディット(pandit：पंडितः) はヒンディー語で学者や僧侶を意味する言葉であるが、この場合は巡礼としてチベットに潜入した人々を指す。河口慧海『チベット旅行記』講談社学術文庫、1978年(再訂版『チベット旅行記(上下)』、2015年)。
Das, Sarat Chandra, "Journey to Lhasa and Central Tibet", Paljor Publications, 2001.
Derek Waller, "The Pundits: British Exploration of Tibet and Central Asia", University Press of Kentucky, 2004.
- (7) 海外への志向を強くしていた西本願寺は上原芳太郎に複数の人員を海外調査に派

遣している。この動きが次代法主大谷光瑞による大谷探検隊派遣へとつながる。

白須賀浄真『大谷探検隊とその時代』（勉誠出版、2002年、65頁）

一方、1880年代後半には帝国陸軍も、荒尾精の漢口派遣を例に見る如く大陸情勢に関して情報収集を始めている。しかしシルクロード方面まで本格的に情報網を広げ始めるのは日清戦争以降となる。

- (8) 能海寛は南條文雄に師事してチベットについて学び、仏典を求めて四川や青海ルートに挑戦したが果たせず、1901年に雲南省大理で消息を絶った。彼は1893年に出版したその著書『世界に於ける仏教徒』（哲学書院）の中で「探検ノ言ハ今日社会ノ流行語一大風潮物ナルカ 此業ヤ豈唯社会ノミノ専有物ナランヤ 又以テ今日仏教徒ノ業ニ移シ得ヘキモノナリ」と記しており、強く世界的な内陸探検時代を意識していた。

- (9) 当時のチベットに関する状況については、拙著及び以下の研究を参照されたい。

松本高明『現代中国研究叢書33 チベット問題と中国—問題発生の構造とダライ・ラマ外交の変遷—』（アジア政経学会、1996年、8-9頁。）

张羽新编著『清朝治藏典章研究（上）（下）』（中国藏学出版社、2002年。）

- (10) 彼以前の入蔵者たちが日本出発からラサ到着まで必要とした時間は、インドに於ける準備期間も含めて河口慧海は45ヶ月、寺本婉雅は82ヶ月、成田安輝は48ヶ月（試行錯誤期間も含む）かかっている。それに比較すれば矢鳥は入蔵を25ヶ月とかなり短期間で達成した。

- (11) ダライ政権の成立した1642年から使用されていた政府の名称。正式には「諸方に勝利せるガンデンポタン：དགའ་པོ་འཕགས་པོ་འབྲུག་པོ་འཕགས་པོ་འབྲུག་པོ་」。

- (12) Tsepon W.D.Shakabpa, *Tibet: A Political History*, Potala Publications, 1984, New York, p.250. (邦訳 W.D. シャカバ著、三浦順子訳『チベット政治史』亜細亜大学アジア研究所、1992年、308頁。)

- (13) 木村肥佐生「序文 冒険野郎の先駆者矢鳥保治郎」（金井晃編、矢鳥保治郎『入蔵日誌』（チベット文化研究所ポタラブックス、1983年。)

- (14) 金井晃、前掲書、102-121頁。

- (15) 地図参照。表音はWylieによる。タルツェドと表記されることが多い。タルツェムド（旧名：打箭炉：ཏར་རྟེ་མུ་ཏོ་ tar rtse mdo、現康定市）は、現在は人口十一万人が居住する四川省甘孜藏族自治州の州都である。

- (16) 江本嘉伸『西藏漂泊（下） チベットに魅せられた十人の日本人』（山と溪谷社、

1994年、32-34頁)

- (17) ナショナリズムの原義は侵略的な意味合いとは切り離して定義される。国民国家建設の国民統合過程において、こうした自国民の活躍を国家の威容と重ね合わせてさらに国民意識の発揚を図る事例が多々見られる。言わばナショナリズムの原初的な形であるが、それは他国との相対化に対して優先されることが多い。
- (18) ナショナリズムが先鋭的な形で強圧的に拡大した軍国主義の体験を持つ研究者は、春浪の持つそうした色彩に対して条件付きの評価に止める。例えば佐藤忠男は少年小説が政治小説の系譜に位置することを指摘しておきながら、そこに「ジュール・ヴェルヌの素朴な科学礼賛を愛国主義・進出主義に全くぬりかえてしまった」(佐藤忠男「少年の理想主義」、西英生編『少年小説大系 別巻第5巻 少年小説研究』三一書房、1997年、16頁)とする。また、二上洋一も「滅私奉公という古いモラルに縛り付けられているが故に武侠であり、ロマンの香り」を持つとする(二上洋一「少年小説の系譜」、西英生編、同上、47頁)。またそういった原体験を持たないが、時代背景を取り込んだ評価を行った會津信吾も「政治小説ブームの中で、南進論政策を反映した海洋冒険小説」が書かれ、押川はその流れに「ヴェルヌと南進論小説、この二つを土壌にしてさらにいや増すロシア帝国の脅威に対抗するナショナリズムをテーマに」取り込んだと分析した(會津信吾「科学冒険時代(抄)」西英生編、同上、397頁)。児童文学の立場からは、相川美恵子は「若者をファンタジックな冒険としての戦争へと開放させ、雄大な愛国ロマンティズムを鼓舞した」とし、そこに南進論、SF的発想、愛国と冒険と軍事の要素を一体化させ次世代に継承したとする(相川美恵子『日本の少年小説「少国民のゆくえ」』インパクト出版、2016年、289頁)。
- (19) 押川の小説を政治小説から派生したものと位置づける論者は、彼の師匠である巖谷小波や反自然主義を標榜し純文学界から距離を置きつつも翻案による自由奔放さで異彩を放った黒岩涙香からの影響を指摘する。(高橋康雄「夢の王国(抄)」西英生編、前掲書、327頁)或いは(伊藤秀雄『少年小説大系 第2巻 押川春浪集』三一書房、1987年、461頁)
- また高橋は黒岩涙香主催の『萬朝報』の懸賞小説に投稿する読者との共有空間の存在を指摘する。(高橋康雄、前掲書、329頁)
- (20) ここで用いるナショナリズムとは「その多くが自ら属していると認識する実体的或いは潜在的な国民を、他国民と同様な立場で自ら統治したり独立を獲得しようとする思想的活動」という古典的定義に依拠している。

- Anthony D. Smith, *Theories of Nationalism* (2nd ed.), 1983 (1st ed.1971), Duckworth, London, P. 171.
- (21) 鈴木康史『押川春浪の『武俠六部作』の構造と読者共同体—『冒険世界』に参加する読者たちと媒介者としての春浪—』（『奈良女子大学文学部研究教育年報 第9号』）
- (22) 島貫兵太夫は、押川春浪の父方義が、仙台神学舎で教師をしていた頃の学生であった関係で紹介された（金井、前掲書、100頁）
- (23) 浅田晃彦、『世界無銭旅行者 矢島保治郎』（筑摩書房、1986年、28頁。）
- (24) 藤田拓之「『国際都市』上海における日本人居留民の位置—租界行政との関係を中心に—」（『立命館大学言語文化研究21巻 4号』、122頁。）（http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_21-4/RitsllLCS_21.4pp121-134FUJITA 2018年10月15日閲覧）
- (25) ただし上海の日本人居留民社会は、企業に勤務して派遣されて駐在している人々と、現地に住み込んで店舗や労務などを行っている人々の間で、前者を「会社派」、後者を「土着派」と称して分離していた。（<http://id.nii.ac.jp/1073/00003780/>）2018年10月12日閲覧）
- 山村睦夫、「戦前期上海における日本人居留民社会と排外主義1916～1942（上）：『支那在留邦人人名録』の分析を通じて」（『和光経済』47巻2号、2015年）。
- (26) 領事館付武官のネットワークを使ったため、紹介は将校団の間で行われた。また便宜を図るにしても、部隊施設の利用許可を出すためにはある程度以上の裁量権が必要となるため、彼に紹介された軍人は佐官以上の者が多かった。
- (27) 中国人従業員と日本人雇用主の間で、紛失した貴重品を巡って対立があり、雇用主の見解が受容できなかったことが起因しているという。（浅田、前掲書、46頁）
- (28) 北京滞在期間中に同年5月9日から7月21日まで投宿した一声館という下宿を兼ねた旅館では、長期滞在することで割り引いても月15円になり、今後の予定を考慮すれば宿泊費の節約は必須であった。また後に指摘されることであるが、彼は人との交際において派手好みなところがあり、かなり散財する傾向があったようである。（同上、47頁、74頁。）
- (29) 移動中の負担は衣食住全てに及ぶが、特に大きいのは防犯である。（浅田、前掲書、66頁）
- (30) こうした機関を用いる手順は、県城に到着した段階で旅券と護照（「内地遊歴護

照」。駅を使用する通関許可証)を提出し、そこで次の行程に用いる馬車もしくは馬の予約をする。

(31) 浅田、前掲書、77頁。

(32) 同上、76頁。

(33) 江本、前掲書、(下巻) 20頁。

(34) 浅田、前掲書、85頁。

(35) 馮明珠『近代中英西藏交渉與川藏邊情 從廓爾喀之到華盛頓會議』國立故宮博物院、1996年、214-200頁、267-277頁。

こうした社会改革が効果を上げていたか否かは議論が分かれるところであるが、1911年に河口慧海が二度目の入藏を果たしたとき、「ラサの街にいささか清潔になり、また便所ができてい」る」ということを指摘しており、一定の効果が上がっていたことがわかる。

(36) 江本、前掲書(下)、26頁。

(37) 江本、同上、23頁。

(38) 木村肥佐生による序文「冒険野郎の先駆者矢島保治郎氏」(金井、前掲書)

(39) 浅田、前掲書、14-20頁。

(40) 日本の軽工業における産業革命はまさにこの地が舞台となっており、そして富岡で生産された生糸は早くも官営工場営業開始翌年の1873年ウィーン万国博覧会でその品質を評価されている。その結果、1890年の恐慌によって一時的に停滞はしたものの、一貫してこの地は景気がよく、1909年には生糸輸出量で清朝を抜いて世界一となって昭和初期までの黄金時代を現出させ、前橋から伊勢崎は隆盛を極めた。

(41) この時代は中学を落第することはさほど珍しいことではなく、また他の中学に編入を繰り返す者も多かった。矢島は2年次進級に2度失敗し、その後前橋中学沼田分校に編入した。ここは本校から無試験で編入できたからであるが、学力が一段階下であると見られ、本校への復帰は困難であったという(浅田、前掲書、18頁)。

(42) 同上、19頁。

(43) 浅田、前掲書、22頁。

(44) 本稿における『萬朝報』の位置づけは、正統な政治メディアの大新聞や純文学などと距離を置き大衆に近い場所で発信し続けたというものである。考究対象がナショナリズムや特定の思潮に対する大衆の共感であるので、より直接的に訴える力を持つと考えた。

- (45) 柳田はまた、明治天皇による「華族に海外留學周遊を奨励し給へる勅諭」（明治4年10月22日）が発せられていたことは、日本の国民が「その方面に飛躍すべき運命が明示されていた」ことであり、国民的理想であったとしている。

柳田泉、「政治小説の一般（二）」（東海散士編、『明治文學全集 6 明治政治小説集（二）』、筑摩書房、1967年、446頁）

また必ずしも海外雄飛が軍事的視野でのみ語られていなかったものの証左として、蝦洲生「青年の外遊を促す」（『萬朝報』1898年5月5日付論壇）では、「然り青年の世に處し身を立つべきの地は、獨り狹隘なる海内のみに限らざるなり、茫々たる六大洲、大和青年が骨を埋むるの山は、到る處に翠なるべし、若し青年にして窮屈なる社会に立つを厭はば、奮ふて海外に遊び、海外の事業に従ふべし」と論じ、海外への見聞と事業経験を積むことを奨励している。

- (46) 柳田、前掲書、445頁。

- (47) 北上次郎『冒険小説論』（双葉社、2008年、321頁）

- (48) 角幡唯介は「探検は土地の物語、冒険は人の物語」と表現しているように、探検は記録にして公的に認知される必要があるのに対し、冒険は主人公は自分であるという点で違いがあるとする（高野秀行・角幡唯介『地図のない場所で眠りたい』講談社、2014年、86頁）

- (49) 鈴木康史、前掲、29頁。

- (50) 柳田泉「政治小説の一般」（戸田欽堂、『明治文學全集 5 明治政治小説集（一）』筑摩書房、1966年、432頁）。蘇峰の原文は以下のものである。

徳富蘇峰「近来流行の政治小説を評す」（『國民之友』1887年7月）

- (51) 佐藤勝『日本児童文学大系 3』（ほるぷ出版、1978年、解説）

- (52) 池田浩士『大衆小説の世界と反世界』（現代書館、1983年、200頁）

- (53) 木村直恵『〈青年〉の誕生 明治日本における政治的実践の転換』（新曜社、1998年）

- (54) 佐藤忠男、前掲書、10頁。

- (55) 山樵亭主人、『新月山田寅次郎』（岩崎輝彦私家版、1952年）

そのほか学生が徒手空拳で樺太や北海道といった僻地まで行って、現地の牡蠣小屋で稼いで帰ってきたなどという話もある。

- (56) 1909年7月の会誌『救世』第5巻79号には南洋在住大友信太郎による「南洋爪哇における日本人の地位及び商業」が掲載されており、さらに会員菅野刀夫は矢島と同様にロシアから南米、南洋と広く無銭旅行を行っている。或いは爪哇（ジャワ）と布

哇（ハワイ）を勘違いして現地で其れを知り途方に暮れる学生なども報告されている。
青木澄夫『日本人が見た100年前のインドネシア 日本人社会と写真絵葉書』（The
Daily Jakarta SHIMBUN、2017年）

(57) 直接の契機は河口慧海の『西藏旅行記』が発刊されたことにより、日本国内でチベット熱が高まったこととされる。早期除隊を実現するために、彼は精神を病む芝居をしたという。（金井、前掲書、25頁）

(58) 1897年（明治30年）、キリスト教義に則って苦学生救済の為に島貫兵太夫が創設。
島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』宝文堂、1980年）

「力行会とは」（http://rikkokai.or.jp/?page_id=114 2017年 9月30日閲覧）

(59) 当初の構想は、ユーラシア大陸を横断してアフリカをめぐり、そこから先は情況次第ではあるものの、最後は合衆国にしばし滞在した後、ベーリング海からロシア領を通して帰国する計画だと語っている。（浅田、前掲書、25頁）

(60) 矢島は旅行中に様々な場所で教会に立ち寄っている。中学中退後に通った前橋教会ではさほど教義に興味を示さなかったとされるが、「日露戦争中も自分は不殺であった」と述懐していることや行く先々での礼拝に参加するなど、その意識の根底にキリスト教への共感を強く持っていることが窺われる。

(61) 宮城県石巻出身の本間儀兵衛は、若い頃の移民生活の描写において力行会の現地支部の役割について多く記述がある。（本間儀兵衛、『出稼ぎアメリカ明治日記』無明舎出版、2016年）

(62) 「観光を目的とする旅行者は、先人の作ったイメージを確認することで満足する」というのは、観光学では基本原理と受け容れられている。（W. リップマン、『世論上・下』岩波文庫、1987年）

(63) 「スエン、ヘゼン（本日入京の瑞典探検家）」『東京朝日新聞』（1908年11月6日付）。

(64) 鈴木康史、前掲、30頁。

(65) タルツェムドから父新蔵宛てに資金の無心をする手紙には例外的に「武侠」的表現が用いられている。

「拝啓 母国もながら当地は殊更天高く地清き感有之候。万山雪峰庭前に白雪の降るも近きにあり。是れと同時に兄の風向は一刻と良好となり、実に痛快極まりなく、此所に前途の樂觀を報ず。……兄は母国よりの心よき便りなれば、一夜母国の空を望んで決心する所ありしが、天は命ずるに任務あり、汝東洋の快男子急くなかれと!! 遂に留まりて存生の次第なり。……略」（1910年10月10日付手紙より抜粋）

- (66) 押川春浪「偽冒険家を痛罵す」(『冒険世界』1911年1月号)
- (67) 「冒険世界の出現活躍！」(『冒険世界』創刊号、1908年、巻頭辞)
- (68) 北上洋一「少年小説の系譜」(西英生編『少年小説大系 別巻第5巻 少年小説研究
また横田順彌、會津信吾『日本SFの祖 快男児押川春浪』(パンリサーチ インシュ
ティテュート、1987年、16頁)
- (69) 横田順彌、會津信吾、前掲書、224頁。
- (70) 〈成美の気風〉と題する感想文からの抜粋。(浅田、前掲書、78頁)